

On the Roofs of Myanmar Wooden Architecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 桂 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1052

ミャンマーにおける木造建築の屋根について

On the Roofs of Myanmar Wooden Architecture

佐藤 桂*
Katsura Sato

1. はじめに

ミャンマーの木造建築にとって、屋根は「アイコン」である、と建築家レイモンド・ミョーミンセン氏は語っていた¹⁾。すなわち、それは建物の性格や用途、所有者の社会的地位などをわかりやすく「見せる」ための表現手段である。このように考えると、日本とミャンマーの屋根の共通性が見えてくるようである。

もともと屋根は、雨や風、強い日差しなどから、人間を保護するためにつくられた構造物である。しかしながら、それは長い歴史の中で、機能的な役割にとどまらず、多くの象徴的な役割を担ってきた。身近な例を考えても、戦前の日本に広く展開された「帝冠様式」などは、私たちにとっての屋根が、ある種の文化的アイデンティティに直結していることを示唆している。階層を重ねるのではなく、水平的に展開した日本の伝統建築もまた、屋根の意匠によって、その内部の空間性や格式を表現していたと言われるからである。

本稿は、ミャンマーにおける木造建築の柱に注目した前稿²⁾に引き続き、その屋根に関して、歴史的な考察を行うものである。地中に埋まった最古の遺構が、先史時代まで遡り得る柱とは異なり、屋根に関する情報はきわめて少なく、発掘調査で出土する瓦がその存在を証明するのみである。そのため本稿では、遺構や出土遺物を補完する史料として、壁画などの図像に描かれた木造建築の屋根の表現を参照し、可能な限り復元的な考察を試みたい。

2. 壁画の主題と技法の変化：バガン時代からコンバウン時代まで

インドを発祥とする仏教建築は、その後、世界の各地へと伝播していく中で、それぞれの土地の材料や工法をはじめとする土着の建築文化と融合しながら、様々に変貌していった。そのような意味において、世界に分布する仏教建築の多様性を歴史的に紐解いていくと、それぞれの国や地域における建築の諸相が見えてくる。

ミャンマーでは、ピューの時代に仏教が伝来し、同時に仏塔や僧院といった仏教建築の基本形も、インドから直接もたらされたと考えられている³⁾。ところが、バガン時代(1044-1287)になると、これらに独自の発展が見られるようになる。その一例が、前稿でも取り挙げた木造の屋根と柱の痕跡を残す煉瓦造の僧院遺構であり、バガン遺跡では同様の形式をもつ多数の遺例を観察することができる。

これに加えて、当時の壁画やテラコッタ製の装飾板などに描かれた図像の中にも、木造建築の

* 工学部非常勤講師 (建築デザイン学科)



図1 Nga-phon-thin-yaung (No. 1536) の壁画より
(13世紀)



図2 Pitakat-taik (No. 62) の壁画より
(1824年)



図3 Sula-mani-gu-hpaya (No. 748) の壁画より
(寺院は1183年／壁画は1778年)

表現を数多く見出せる。まずはバガン遺跡の『目録』⁴⁾から、壁画を有する500の遺構に関して、木造建築と推定される図像を抽出してみよう。

先行研究⁵⁾でも指摘されていたように、バガン時代の壁画は基本的には仏伝や本生譚(ジャータカ)などの仏教説話、あるいは過去28仏を繰り返して描いたものが大半を占め、いわば宗教画の類である。しかし時代を下ると、宮廷や僧院などを舞台とした絵巻物風の場面展開となり、次第に風俗画の様相を帯びてくる。

これに伴い、壁画に描かれる建築にも変化が生じる。バガン時代の壁画では、建築は尊像の背景に単体で描かれるものがほとんどである。これがニャウンヤン時代(1599-1752)になると、王宮などの複合施設も登場し、さらにコンバウン時代(1783-1885)には、僧院や様々な付属施設をはじめ周辺の自然や動物なども描き込まれて、より生活に近づいていく。

絵画の技法も、これに併せて変化する。バガン時代の壁画では、建築は立面図のように平面的な表現で、大抵は長手(桁行)の面が尊像の背後に描かれるのみである。空間的な表現は非常に稀であり(図1)、また、その遠近の描き方は後述するコンバウン時代とは大きく異なっている。

コンバウン時代になると、アイソメトリックな図法によって、建築の奥行きや内部空間も描かれるようになる（図2・図3）。これにより妻面の意匠も描かれるようになるため、屋根の形式も確認しやすくなるが、この点については後述したい。なお、このように16世紀以降、絵画技法が変化する要因は明らかではないが、タイ北部など、外国からの影響があった可能性も指摘されている⁹⁾。また、1850年代以降は西洋世界との交流によって、遠近法や風景画など西洋画の技法が伝わったことも知られている。

ここで、複数の建物が同一場面上に描かれたバガン時代の壁画（図1）を改めて観察すると、光背をもつ尊像の坐す建物には、大きな棟飾りが載っており、屋根を2重に重ねたものも見受けられる一方で、尊像が不在である建物の屋根は、いずれも単層で、棟飾りも描かれないことが了解される。それらの壁面に描かれる半分だけ開いたような開口部は、後述するジャータカの布絵（図25）にも観察されるが、尊像の不在を意味するのだろうか。詳細は不明だが、いずれにせよ棟飾りや多重の屋根は、宗教的な重要性の表現とみなすことが可能であろう。実際、バガンの寺院内に描かれた壁画の木造建築のほとんどは多重屋根で、棟飾りを有している。

3. 多重屋根の分類

それでは、これらの多重屋根は、どのように分類できるだろうか。尊像は多くの場合に仏陀で、稀にブラフマーも描かれるが、背景となる建築や菩提樹のような樹木の基本的な構成に変わりはない。なお、壁画には煉瓦造建築の描写もみられるが、本稿では木造のみを対象とする。



図4 Taung-pon-loka-na-tha (No. 315) の壁画より
2重屋根（12世紀）



図5 Pe-nan-tha-gu (No. 1481) の
壁画より 2重屋根（13世紀）



図6 Thin-kan-yon (No. 712) の壁
画より 2重屋根（1244年か）



図7 寺院 (No. 473) の壁画
より 2重屋根+庇（13世紀）



図8 寺院 (No. 653) の壁画より 2重屋根
+庇か（1221年か）（ブラフマー像）

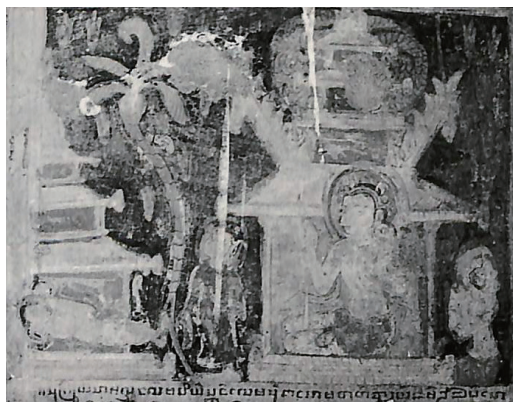


図9 Than-bu-de-hpaya (No. 657) の壁画より
(左) 3重屋根 / (右) 鍔+2重屋根 (1224年)



図11 寺院 (No. 356) の壁画より
鍔+3重屋根 (13世紀)



図10 寺院 (No. 1422) の壁画より
鍔+3重屋根 (13世紀)



図12 Than-bu-de-hpaya (No. 657) の
壁画より2重鍔+3重屋根 (1224年)

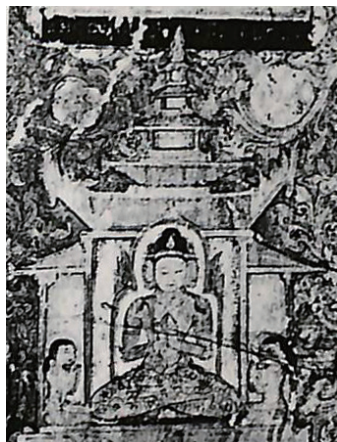


図13 Winido-hpaya (No. 659) の壁画より
2重鍔+3重屋根 (13世紀)

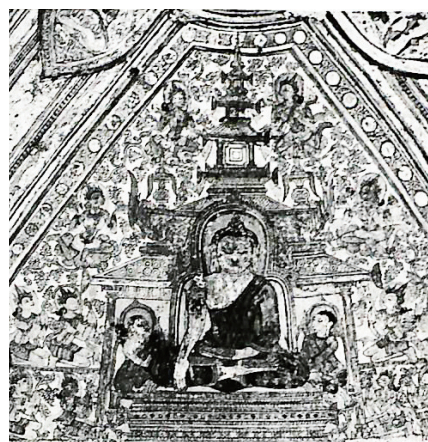


図14 Tatkale-hpaya (No. 572) の壁画より
2重鍔+3重屋根 (1193年)

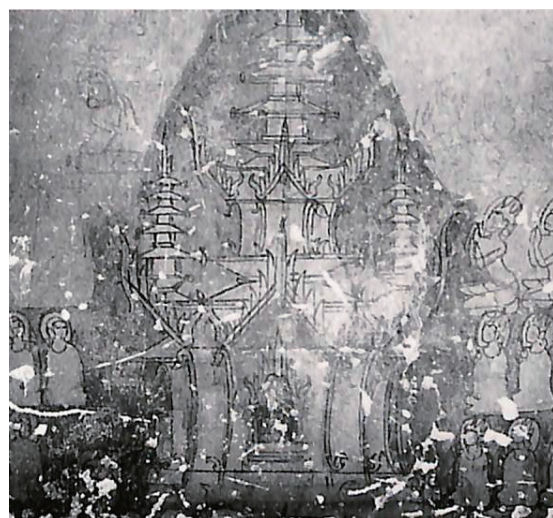


図15 寺院 (No. 477-478) の壁画より
両脇に5重塔を伴う2重鍔+2重鍔+3重屋根 (1223年)

多重屋根には2重(図4~図6)、3重(図7~図9の左)の例が確認されるほか、さらに高く塔状に延びるもの(図9右~図15)があり、これらは通常、現地語で「ピャッター」と称される「塔(尖塔)」の描写であると考えられている。

ところで、これらの塔状の屋根の表現を詳細に観察すると、すべての場合において、下層部分は入母屋の原始形態である鍔(しころ)屋根のように描かれていることがわかる(図9右~図15)。絵画だけでは判断が難しいが、これらが古代日本の家屋文鏡や、古墳時代の家形埴輪の屋根形状と類似していることは、特筆に値するだろう(図16・図17)。特に、

鋸（入母屋）屋根をもつ家形埴輪と比較すると、屋根勾配が切り替わる部分の表現や破風の転びなど、共通する要素が観察され、興味深い。

しかしながら、上述したバガンの壁画の塔の場合には、このような鋸屋根の上に3重、あるいはそれ以上の多重屋根の建物が載り、全体として塔の様相を呈している。ここで考えられるのは、後者は前者の上に載っているのではなく、実際には背後に位置し、正面から見ているために上下の表現になっているという可能性である。あるいは、バガン考古博物館に展示されている同時代の「軍隊長の館」の模型（図18）のように、本当に屋根の上に載っていたのかも知れないが、この模型の作製根拠は不明であり、今後、精査する必要がある。

興味深いのは、「軍隊長の館」が宗教建築ではなく、軍事的な機能を備えた住まいであったという点である。屋根の上に載せられた小屋は、おそらく監視用の「望楼」であり、これが次第に権力の象徴としても機能するようになったように推測される。「望楼」の屋根が2重に重ねられていることが、実用的ではなく、宗教建築を想起させるからである。この形式が上述した塔の発生と関連しているのかどうか、さらなる考察が要されるだろう。

他方、ミャンマー政府考古局より提供された未刊行資料『ピャッター研究論文』⁷⁾には、壁画に描かれる塔の描写の時代的変遷に関する言及がある。すなわち、バガン時代から第一インワ



図16 家屋文鏡に描かれた4棟の建築（4世紀）
（佐味田宝塚古墳出土）



図17 今城塚古墳出土の原始入母屋屋根をもつ高床式建築の家形埴輪（6世紀）
（今城塚古代歴史館所蔵）



図18 バガン時代の「軍隊長の館」の模型（左）中心部分を正面から見る／（右）全体
（バガン考古博物館所蔵）

時代、コンバウン時代へと時代が下るにつれ、塔の描かれ方が変化することである(図19)。バガン時代の塔には「トゥピカー」(頂部飾り)と「タウンバン」(軒先飾り)がなく、これらが第一インワ時代に登場したこと、「平面は正方形で、屋根の数は3重から5重という基本形に変化はない」ことが述べられ、詳細な解説は見られない⁸⁾。しかしながら、同書に挙げられたバガン時代の塔の描写は、やはり5重の塔というよりも、鋳屋根の上に3重の屋根が載っているように見える。

建築的な発展の過程を想像するならば、バガン時代には上下で異なる構造をもっていた屋根が、第一インワ時代になると一体化し、軒先のラインと背の高い頂部飾りで「反りのある三角形」のシルエットを形成するようになり、さらにコンバウン時代には構造的な整理が進んで、多重化、高層化が実現されていったように推定される。この時代になると、四隅に凹凸をもつ平面も登場したことがわかる。

時代も用途も異なるが、日本の近世城郭に出現した天守もまた、入母屋の上に「望楼(高樓)」を載せた形式から出発し、次第に軒先のラインを揃えた「層塔」へと構造的な発展を遂げた。どちらも入母屋から始まるのは、「破風」に特別な意味合いがあったからではないだろうか。

入母屋の発生に遡れば、最初の形態は上述のように、切妻に庇を回した鋳屋根であった。大阪高槻市に所在する古墳時代の史跡内に復元された鋳屋根をもつ掘立柱建築は、2本並んだ「双子の」⁹⁾柱のうち、1本が切妻の上屋を、もう1本が下屋の構造を支えている¹⁰⁾。双子の柱穴はバガンの王宮址でも発掘されており、建築的な解明は今後の課題となっているが、この件は稿を改めて検討したい。

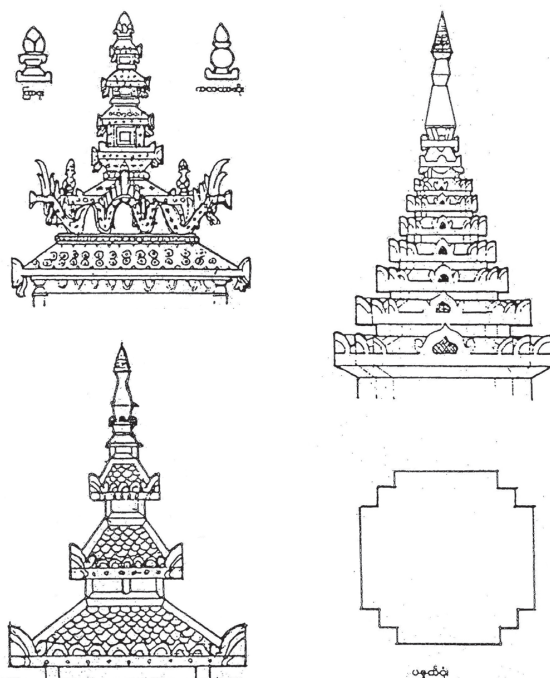


図19 ミャンマーにおける塔の絵画表現の変化
(左上)バガン時代/ (左下)第1インワ時代/ (右)コンバウン時代



図20 史跡新池ハニワ工場公園内に復元された鋳屋根をもつ工房(6世紀)
「双子の」掘立柱の1本は切妻屋根を、1本は下屋の構造を支える



図 21 涅槃像と 3 重の方形屋根の建築
(バガン考古博物館所蔵)



図 24 3 重屋根の建築
(東ペッレイ内)



図 22 涅槃像と方形屋根の建築
(バガン考古博物館所蔵)



図 23 涅槃像と 2 重の方形屋根の建築
(アーナンダ寺院内)

4. 方形・寄棟・切妻屋根の表現

図像表現としての木造建築の屋根を集めていくと、それらには数種類があり、場面によって使い分けられていたらしいことがわかる。たとえば仏陀の涅槃像の場面では、合掌する信者らとともに、方形の屋根が描かれる。単層（図 22）、2 重（図 23）、3 重（図 21）の例があり、いずれも同種の建物に見える。方形の屋根は涅槃図以外にも登場するが（図 24～図 26）、それらとは棟飾りの表現で区別できそうである。

これら以外の大半の屋根は、寄棟のように見受けられる（図 1・図 4～図 8）。しかしながら、絵画の技法的な問題もあり、断定することはできない。あくまでも表現上、そのように見えるというだけである。

コンバウン時代になると、妻面の意匠も描かれるようになるため、判断ははるかに容易となる。三角形の破風の描写からは、それが切妻屋根であることが理解される（図 3）。破風の中央には、縦線で描かれた棟束の表現も確認することができる（図 2・図 3）。

また、この時代の木造建築に関しては、実際に遺構や古写真、図面なども残されるため、これらと図像との比較対照も可能である。コンバウン時代の多重屋根は通常、一番上のみが切妻で、その下は寄棟となっているが、この形式が果たしてバガン時代まで遡り得るものかどうか、現段階ではわからない。アーナンダ寺院内の壁龕の一つに僧院の妻面らしい表現があり、上層は切妻屋根で、破風には棟束の描写も確認できる（図 27）。これがバガン時代の作であることが証明できれば、一つの手掛かりになり得るだろう。

バガン時代の切妻屋根に関して検討すべき、もう一つの重要な物証として、煉瓦造の僧院遺構



図25 ジャータカを描いた布絵 (1100-1150年) (部分)
(バガン考古局所蔵)



図26 同左 (部分)
(バガン考古局所蔵)



図27 壁龕内に見られる僧院の妻面
(アーナンダ寺院内)

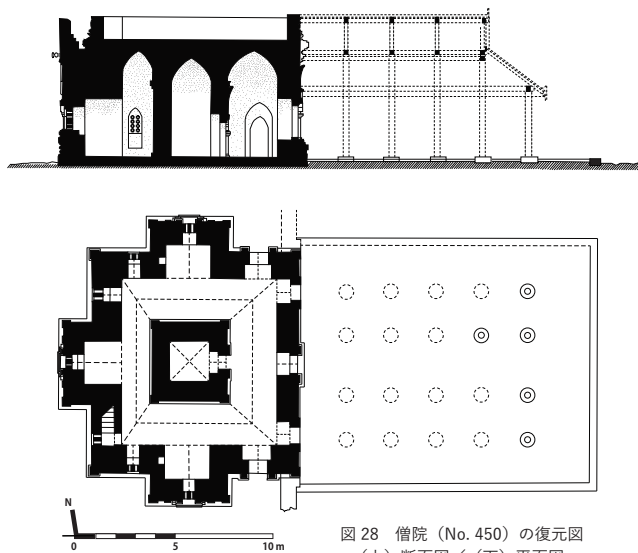


図28 僧院 (No. 450) の復元図
(上) 断面図 / (下) 平面図



図29 Lay Miethna 僧院 復元模型 (1223年)
(バガン考古博物館所蔵)

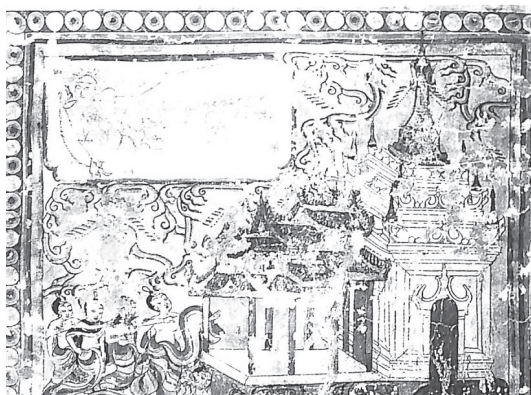


図30 Shwe-kyaung-u-hpaya (No. 2007) の壁画より
煉瓦造祠堂に木造屋根が取り付いた建築の描写 (18世紀)



(2重) No. 690



(2重) No. 691



(2重) No. 685



(2重) No. 689



(2重) No. 707



(2重) No. 694



(3重) No. 703



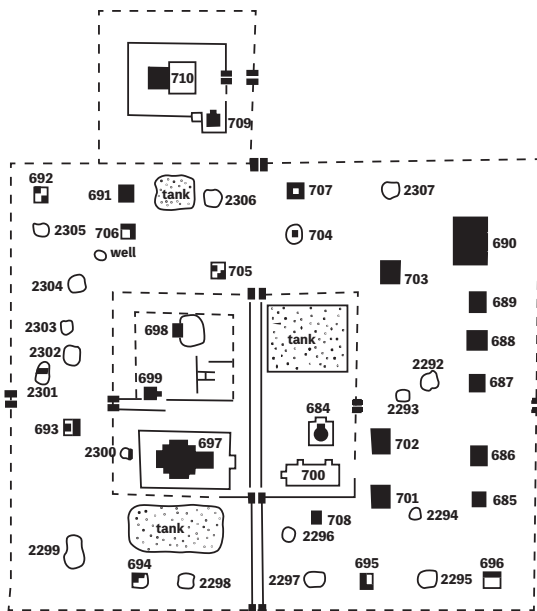
(3重) No. 686



(3重) No. 702



(3重) No. 688



いずれも東側壁面に2重・3重の切妻屋根が取り付けられていた痕跡が確認できる。ただし、ほとんどの場合はすでに修復の手が加えられているため、注意が必要である。

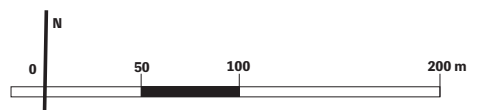


図31 Hsin-byu-shin complexに残る木造多重屋根の痕跡

に残る木造屋根の痕跡がある。これに関しては、先行研究によって復元図や模型も作製されており(図 28・図 29)、実際の復元も行われている。その一つが、バガン南部に位置するシンビューシン僧院群にあるが、現地でも類似する複数の遺構を観察すると、推定される屋根には 2 重と 3 重があり、勾配なども思いのほか多様であることがわかる(図 31)。しかしながら、ほとんどの遺構はすでに修復後の状態であるため、注意が要される。

ここで注目されるのは、中央の最上の屋根の下端に、天井の「あたり」が観察されることである。ただし、天井と屋根との間に小壁の立ち上がりはなく、この点において、コンバウン時代の多重屋根とは異なっている。小壁はバガン時代からコンバウン時代に至る過程で登場したものであるらしい。このことは、さらに精査が必要であろう。

一方で、現在の復元案については、再考の余地があるように思われる。壁画の中には、煉瓦造の祠堂に木造の屋根が接合する描写(図 30)も描かれているが、時代は下るものの、屋根の形状がより複雑であることが留意される。今後の研究の進展に期待したい。

5. 入母屋屋根の表現

ここまで、図像に描かれる鋳(入母屋)や方形、寄棟、切妻といった、幾つかの屋根形式について述べてきたが、最後にもう一度、入母屋の例を取り挙げたい。

それは、木造建築を石造に映して再現したような、ニャウンヤン時代の石窟寺院である。

モンユワから西へ約 25km に位置する聖地ポーウィンタウンには、大小様々な石窟寺院が穿たれており、内部には鮮やかな彩色が残存することも知られている。その中の石窟 No. 480 には、上述したような鋳ではなく、いわゆる入母屋の屋根を彫り出した外観の表現を見ることができる(図 32)。想像するに、これが造られた 16 世紀から 18 世紀には、このような屋根をもつ木造建築が実在したのであろう。

時代を下り、コンバウン時代になると、壁画には、切妻の破風を正面に見せるような屋根の表現が多く描かれるようになる(図 33・図 34)。破風を大きく飾り、正面に据える手法は、バガン時代から続く傾向であるが、かくして時代とともに複雑化し、重層化し、高層化し、あたかも多くの破風で屋根を飾り立てることが、空間の格式や聖性を高める一つ的手段であったかのようである。このことも、ミョーミンセイイン氏の言う「アイコン」に繋がるのではないだろうか。

6. 結語

以上において、バガン時代からコンバウン時代までの壁画などを題材に、ミャンマーの図像表現に見られる伝統的な木造建築の屋根について整理してきた。得られる情報は限られているが、バガン時代にはすでに、鋳や方形、寄棟、切妻と呼び得るような、複数の屋根形式が存在し、これらが使い分けられていた可能性が指摘された。

ミャンマーと日本とでは、仏教を受容した時代も方法も同じではなく、仏教建築の様相も大きく異なっている。しかしながら、木造建築という観点に立てば、類似する要素や発展過程を読み取ることが可能である。木材を使った建築の手法に、おのずと幾らかの制限や制約が含まれるためである。ここに、ある種の普遍性を見出すことができれば、さらに深く、その本質に迫ることができそうである。



図 32 Po Win Taung 石窟 No. 480 (左) 正面から見る (矢印が右写真の破風の位置) / (右) 破風らしき彫刻の表現



図 33 Shwe-kyang-u-hpaya (No. 2007) の壁画より (左) 入母屋屋根か (18 世紀)

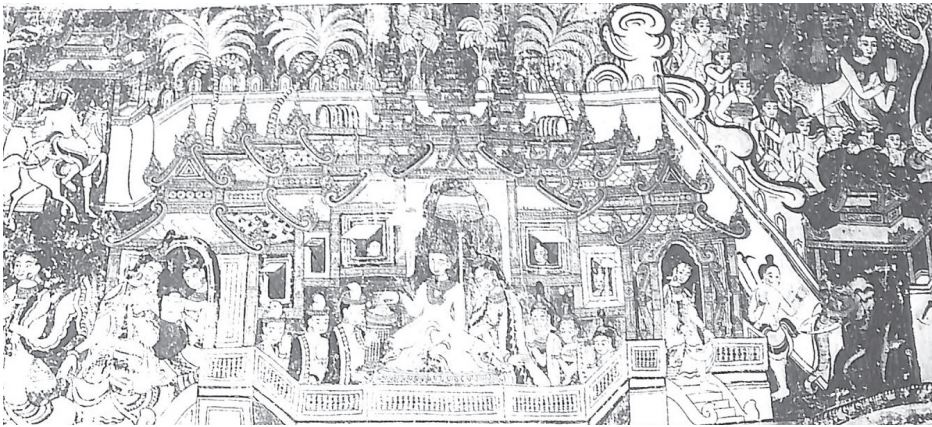


図 34 Le-thak-kyang-u-hpaya (No. 1936) の壁画より 王宮の場面か (18 世紀)

謝辞

本研究は、平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 (B)「東南アジア史の統合的編年プラットフォームの構築:「長い 12・13 世紀」を中心に」(研究代表者: 青山亨・東京外国語大学教授)の研究成果の一部である。

註

- 1) レイモンド・ミョーミンセイン「ミャンマーにおけるコンバウン朝時代（1752-1885）の木造建築に関する初期研究」東京文化財研究所編『ミャンマーの木造建築文化』2015年3月, pp. 9-39.
- 2) 佐藤桂「ミャンマーにおける木造建築の柱について」『武蔵野大学環境研究所紀要』第7号, 2018年3月, pp. 147-161 (<https://core.ac.uk/download/pdf/154372797.pdf>).
- 3) ミャンマーにおいて最古の仏教遺跡とされるペイタノーからはナーガールジュナコンダと非常に類似した仏塔や祠堂、僧院の遺構が発見されている。いずれも煉瓦造で出土した平面形状は酷似しているが、構法に関しては若干の相違も指摘されており、詳細な調査研究が待たれる。Cf. Ministry of Culture, Republic of the Union of Myanmar, *Pyu Ancient Cities: Harin, Beikthano, Sri Ksetra: Nomination of Properties for Inscription on the World Heritage List*, 2013.
- 4) Pichard, Pierre, *Inventory of Monuments at Pagan*, 8 vols., Paris: UNESCO and EFEO, 1992-2001 を参照。なお、2016年9月の地震を受け、パガンでは現在、これを更新した新たな目録がすでに作成されている。
- 5) 特に大野徹氏による一連の研究に詳しく述べられている。
- 6) Cf. Green, 2005.
- 7) ティンウィンミン『ピャッター研究論文』ミャンマー政府考古局提供, 1994年。
- 8) 石川和雅氏との私信による。
- 9) 「双子柱」の命名は上野邦一先生（奈良女子大学）による。
- 10) 同遺跡の復元は矢野和之氏（文化財保存計画協会）による。なお、横架材の1本1本に対し、それぞれ別個の柱を立てて支える構法は、東南アジア島嶼部オーストロネシア語族の伝統建築における古式を残す建築に見られることが、佐藤浩司氏（国立民族学博物館）によって指摘されている。Cf. 竹中大道工芸館『南の島の家づくり - 東南アジア島嶼部の建築と生活』2018年10月。

主要参考文献一覧

- 大野徹「ビルマの壁画 - パガン時代を中心として -」『東南アジア研究』11巻3号, 1973年12月, pp. 360-381; 「ビルマの壁画 (II) - パガン時代を中心として -」同12巻1号, 1974年6月, pp. 79-90; 「ビルマの壁画 (III) - ニャウンヤン時代を中心として -」同14巻1号, 1976年9月, pp. 270-285; 「ビルマの壁画 (IV) - コンバウン時代を中心として -」同14巻3号, 1976年12月, pp. 442-460.
- 佐藤桂「ミャンマーにおける木造建築の柱について」『武蔵野大学環境研究所紀要』第7号, 2018年3月, pp. 147-161; 「ミャンマーの図像表現にみる木造建築」日本建築学会関東支部研究発表会2018年3月; 「ミャンマー・ペイタノーの「記念堂」遺構にみられる木造の痕跡について」『日本建築学会大会学術講演会梗概集』2018年9月。
- 佐藤桂・石川和雅「コンバウン朝ミャンマーの木造僧院建築 - 「連結型」本坊の成立をめぐる -」『アジア仏教美術論集 東南アジア編』中央公論美術出版2019年2月。(刊行予定)
- 東京文化財研究所編『ミャンマーの木造建築文化』2014年3月。
- Anne-May Chew, *The Cave-temples of Po Win Taung, Central Burma. Architecture, Sculpture and Murals*, Bangkok: White Lotus, 2005.
- Fraser-Lu, Sylvia, *Splendor in Wood*, Bangkok: Orchid Press, 2001.
- Green, Alexandra, "Deep Change? Burmese Wall Paintings from the Eleventh to the Nineteenth Centuries," *The Journal of Burma Studies*, vol. 10 (June 2005), pp. 1-50.
- Herber, Patricia, "Burmese Court Manuscripts," in Donald M. Stadtner ed., *The Art of Burma. New Studies*, Mumbai: National Centre for the Performing Arts, 1999, pp. 89-102.
- Mollanen, Irene and Ozhegov, Sergey, *Mirrored in Wood: Burmese Art and Architecture*, Bangkok: White Lotus, 1999.
- Moore, Elizabeth, "Monasteries of Mandalay," *Spafa Journal*, vol. 6 (1996), no. 3, pp. 5-34.
- Munier, Christophe and Mint Aung, *Burmese Buddhist Murals. Volume 1 - Epigraphic Corpus of the Pain Taung Caves*, Bangkok: White Lotus, 2007.
- Pichard, Pierre, *Inventory of Monuments at Pagan*, 8 vols., Paris: UNESCO and EFEO, 1992-2001; "Entre Ajanta et Mandalay. L'architecture monastique de Pagan," in Pierre Pichard ed., *Etudes Birmanes*, Paris: École française

d'Extrême-Orient, 1998, pp. 147-167; "Ancient Burmese Monasteries," in Pierre Pichard ed., *The Buddhist Monastery*, Chiang Mai: École française d'Extrême-Orient, 2013, pp. 59-72.

- Pratapadiya Pal, "Fragmentary Cloth Paintings from Early Pagan and Their Relations with Indo-Tibetan Traditions," in Donald M. Stadtner ed., *The Art of Burma. New Studies*, Mumbai: National Centre for the Performing Arts, 1999, pp. 79-88.

図版出典一覧

- 図 1 *Inventory*, vol. 6, p. 147, 1536 l - West vestibule vault, detail, from north
- 図 2 *Inventory*, vol. 1, p. 131, 62 k - East corridor, detail of east wall
- 図 3 *Inventory*, vol. 3, p. 305, 748 ao - Ground floor, south corridor, north wall, east side
- 図 4 *Inventory*, vol. 2, p. 87, 315 k - Entrance hall, west wall, north side
- 図 5 *Inventory*, vol. 6, p. 64, 1481 m - Ground floor, shrine, S. E. part of wall, detail
- 図 6 *Inventory*, vol. 3, p. 247, 712 m - Entrance hall, south wall, detail, from north
- 図 7 *Inventory*, vol. 2, p. 284, 473 f - Shrine, south wall, west side
- 図 8 *Inventory*, vol. 3, p. 143, 653 l - South corridor vault, one of the Brahmas seated under a pavilion
- 図 9 *Inventory*, vol. 3, p. 150, 657 k - West vestibule, south wall, 2nd scene from left
- 図 10 *Inventory*, vol. 2, p. 135 356 d - Shrine, south-east corner, from west
- 図 11 *Inventory*, vol. 5, p. 375, 1422 j - Shrine vault, detail of north quadrant, from south
- 図 12 *Inventory*, vol. 3, p. 151, 657 p - Shrine north wall, detail
- 図 13 *Inventory*, vol. 3, p. 156, 659 k - Entrance hall vault, south side, detail of Brahma's figures
- 図 14 *Inventory*, vol. 3, p. 30, 572 f - Shrine vault, south quadrant
- 図 15 *Inventory*, vol. 2, p. 295, 477-478 r - connecting corridor, north wall
- 図 16 池浩三『家屋文鏡の世界 古代祭祀建築群の構造原理』相模書房 1983, 口絵写真（上下反転）
- 図 17 筆者撮影（2015年2月）
- 図 18 筆者撮影（2018年5月）
- 図 19 ティンウインミン『ピャッター研究論文』ミャンマー政府考古局提供, 1994, pp. 2-3
- 図 20 筆者撮影（2014年2月）
- 図 21 筆者撮影（2018年5月）
- 図 22 筆者撮影（2018年5月）
- 図 23 東京文化財研究所提供
- 図 24 東京文化財研究所提供
- 図 25 Pratapadiya Pal, 1999, p. 79, figure 1 より（部分）
- 図 26 Pratapadiya Pal, 1999, p. 84, 1b: detail of figure 1
- 図 27 筆者撮影（2018年5月）
- 図 28 Pichard, 1998, figure 8 をもとに筆者作成
- 図 29 筆者撮影（2018年5月）
- 図 30 *Inventory*, vol. 7, p. 338, 2007 f - West vestibule, north wall, representation of the temple with donors
- 図 31 (図面) *Inventory*, vol. 2, p. 202
(写真) 筆者撮影（2018年5月）
- 図 32 筆者撮影（2018年5月）
- 図 33 *Inventory*, vol. 7, p. 339, 2007 l - Shrine, west wall, detail of illustrated scenes
- 図 34 *Inventory*, vol. 7, p. 261, 1936 i - Shrine, west wall, south side, detail of illustrated scenes